「スリーピー・ホロウの伝説」における地方タイプの再考

米　山　正　文

1．はじめに

こんにち、ワシントン・アーヴィング（Washington Irving）の文学史上における評価は高いものとはいえない。一つには、登場人物がいわゆる flat character であり、物語が進行しても depth や development が読み取れないからである。たとえば、アーヴィング研究の碩学ウィリアム・ヘッジスも以下のような手厳しい批評を下している。

> ・・・アーヴィングは特に何か新しいものを生み出す想像力を持っているわけではなかった。昔なじみの物語、芝居、伝説、民話から集められたステレオタイプ的な人物像やプロットにかなり頼っていた。・・・いくつかの物語は厚みがないし、十分に肉付けされておらず、古い話の繰り返しになっている。小説でアーヴィングが探求できる経験や活動、感情の幅も限られたものだ。欲望や達成感、挫折感についてアーヴィングがいえることは、ごくわずかで単純なものである[1]。

ヘッジスは、本来小説で探求されるべき、人間の豊かな内面生活の描写が欠落していることに不満をもらしている。確かに、こうした特質を求めるには、次世代のポー（Edgar Alan Poe）やホーソン（Nathaniel Hawthorne）、メルヴィル（Herman Melville）といった作家が必要となるだろう。

人物像に奥行きがない背景には、ヘッジスが示唆しているように、登場人物がステレオタイプ的な、いわゆる stock character であるという理由がある。こうした紋切り型の人物を登場させ、諷刺やユーモアを使って読者を楽しませるのが、アーヴィングの得意芸となっている。そして、stock character はしばしば、地方的・民族的なタイプと結びつく。たとえば、初期の歴史物語『ニューヨーク史』（*A History of New York*, 1809）は、オランダ植民地時代の統治者を民族的ステレオタイプで滑稽に諷刺している。アーヴィング作品の面白さは、人間性の探求ではなく、むしろ、こうしたステレオタイプ（アーヴィング自身、ステレオタイプであることを知っている）を意図的に使い、いかに登場人物を、そして人間一般を、滑稽で愛嬌ある存在に描くかというところにある。

代表作である短編小説「スリーピー・ホロウの伝説」（“The Legend of Sleepy Hollow,”『スケッチ・ブック』（*The Sketch Book*, 1819-1820）所収）にも、こうした地方的タイプが登場する。ダニエル・ホフマンは、アメリカ小説と民間伝承との関係を分析した、優れた研究書の中で、主人公イカボッド・クレイン（Ichabod Crane）が、民間伝承にみられる、「ヤンキー」（“Yankee”、ニューイングランド地方の人間を指す）を体現していると指摘している。また、イカボッドの恋敵である、ブロム・ボーンズ（Brom Bones）は「奥地人」（Backwoodsman）を体現しており、両者の対決は、「ヤンキー」対「奥地人」という、民間伝承上の「地方的人物」（regional characters）の対決を再現していると述べている[2]。ドナルド・リンジは、ホフマンの解釈を批判的に発展させ、イカボッドとブロムの対決を「ニューイングランド」対「ニューヨーク」（この論文ではニューヨーク市ではなく、「ニューヨーク州」を指すこととする。以下同じ）の対立と再解釈し、移動や変化、改善を常に求める前者に対し、秩序や伝統、安定した社会を求める後者が対比されていると述べる。そして、イカボッドに対しブロムが勝利するという展開は、ニューヨーク出身であるアーヴィングの願望であり、ニューイングランド気質へのアーヴィングの批判が込められていると指摘している[3]。リンジは、イカボッドをニュー

イングランド人（ヤンキー）とするホフマンの論を基盤としながらも、ブロムを一般的な「奥地人」ではなく、「ニューヨーク」を体現する人物とし、地方の対立というモチーフを明確にしたのである。

1960年代に出された、この二人の解釈は決定的であり、批評家の間では定説になったといえる。その後の批評は、イカボッドが典型的な「ヤンキー」（ニューイングランド人）で、ニューヨーク・ハドソン川沿いの村への「文化的侵入者」として諷刺されているという点で一致している[4]。この論文も、ホフマンとリンジの、民間伝承的な人物の対立というモチーフを基に、この地方タイプを再考することを目的とする。その際、以下の三つの点を要とする。まず、多くの批評家はホフマンにならい、ブロムを「奥地人」とみなす傾向が強いのに対し、本稿ではリンジの、「ニューヨーク人」（Yorker）とみなす解釈を採用する。次に、アーヴィングが民間伝承の地方的ステレオタイプを利用していることは間違いないが、そのタイプに（意識的にか無意識的にか）独自の解釈を加え、発展させていることにも注目する。そこにこそ、アーヴィングの作家としての個性が見いだせるはずである。最後に、これまでの批評では、ニューヨーク＝「オランダ系」と単純化・一般化する暗黙の前提があった。しかし、舞台は独立間もないニューヨークであり、すでに長期のイギリス植民地時代を経験している。ヤンキーであるイカボッドを打ち負かすブロムとは何者であるのか、また、「ヨーカー（Yorker）」とは何であるのかを探求する。これにより、「スリーピー・ホロウの伝説」が、たんなる民間伝承の焼き直しではないことを明らかにする。

2. アーヴィングの「ヤンキー」：イカボッド・クレインの再考

ホフマンの指摘通り、イカボッドがヤンキーのstock characterとなっていることは疑いの余地がない。それは、出自や外見、性格や行動などに典型的に表れている。まず、イカボッドはコネティカット州出身で、「鞭を惜しむと子供を駄目にする」という格言を心に留めている清教徒的な学校教師である。教会では賛美歌の名手で、清教徒コットン・マザーの書「ニューイングランドの魔術史」を信奉している[5]。体型は、“Crane”（鶴）という名前の通り、「長身だが、著しく痩せて」いて、「なで肩」で「長い腕と脚、手」を持っており、民間伝承のヤンキーと一致している[6]。（273） 巡回教師であり、一枚のハンカチで家財を結わえ、その家財も節約した最小限のものにまとめており、これも、いわゆる「ヤンキーの物売り」（Yankee peddler）の姿と重なる[7]。（275, 295） 最後に性格に注目すると、学校に泥棒が入らないようにする「巧妙な」（ingenious）仕掛けや、学校経営のため職業以外のあらゆること（地元の農家の手伝いや賛美歌の教師、村の情報屋など）をするという如才なさや多芸さ（変身の能力）、ブロムという強敵にも屈しない柔軟性や耐久性、さらに、求愛の相手カトリーナ（Katrina Van Tassel）の財産を狙う貪欲さ、その財産を元手に西部に土地投機を計画する野心、村から姿を消したあと司法官にまでのし上がるという上昇志向など、典型的なヤンキーの特質が余すところなく体現されている[8]。（275-276, 278-281, 285-287, 295-296）このように、出自から性格まで、分かりやすくカタログのように提示されていることから、アーヴィングがヤンキーのステレオタイプを意識的に使っていることは明白である[9]。

しかし、イカボッドの重要な特質に、典型的なヤンキーにはないものもある。それは大食漢であるという特徴である。これは、読者の笑いを誘うため、またヤンキーの貪欲さを強調するために、アーヴィングがラブレー流のユーモアを取り入れたものと考えられる[10]。イカボッドは「大食い」であり、「ひょろ長いが、大蛇（Anaconda）のように体を膨らませる力」を持つ。（275） カトリーナの父親、バルタス（Baltus）・ヴァン・タッセルの裕福な農場を目にすると、そこで供される豪華な料理を想像し「よだれが出て」くると同時に、「むさぼり食らう（devouring）心の目」（279）には、以下のような光景が浮かんでくる。

> ・・・焼けているブタがみなプディングを腹に入れ、口にリンゴをくわえたまま走り回っている。ハトは心地よいパイの寝床にぬくぬくとおさまり、パイ皮の掛布団にくるまれていた。

… every roasting pigs running about with a pudding in its belly, and an apple in its mouth; the pigeons were snugly put to bed in a comfortable pie, and tucked in with a coverlet of crust; (279)

この後も、料理となったガチョウやカモ、食肉豚、七面鳥、雄鶏が延々と羅列される。馬鹿馬鹿しいほど擬人化されているため読者の笑いを引き起こす場面となっているが、農場の動物たちがイカボッドには食材（料理）にしか見えない様子が描かれている。また、この引用部分において、過剰なまでの子音の反復（いわゆる alliteration）、すなわち、[r] 音、[p] 音、[b] 音、[k] 音の繰り返し（roasting, running; pigs, pudding, apple, pigeons, put, pie; belly, bed; comfortable, tucked, coverlet, crust）は、食べる音を表現していると考えられ、イカボッドが想像の中で料理をむさぼり食らっていることを暗示している。他にも、ヴァン・タッセル家のパーティーに向かう途中でイカボッドが農場を見る場面や、パーティーで並べられた料理を一望する場面でも、同じような alliteration とともに、料理が延々と羅列されている。(286-287) 「大蛇」の比喩や、料理の妄想は、明らかに tall-tale の技巧を示している。アーヴィングはラブレー流の大食漢のイメージを取り入れ、ヤンキーの貪欲さを戯画化（caricature）しているのである。

民間伝承的な特徴を誇張するだけにとどまらず、アーヴィングは独自にヤンキーの特質を追求している。それは、ヨーカー（ニューヨーク人）の登場人物と比較すると浮き彫りになってくる。イカボッドの恋敵ブロムについては様々な特徴があるが、その中で強調されているのが、強い絆で結びついた「仲間」（companion）がいるということである。語り手によれば、ブロムには自分と似たような性格の、3 ～ 4 人の「親友」（boon companions）がおり、いつも騎馬隊の一団のように一緒に行動している。真夜中に近隣を走り抜けるときは、主婦たちが「ほら、ブロム・ボーンズとその一団（gang）が通っていく！」と言われている通り、一種「ブロム団」のように見られているほどである。また、ブロムが恋敵イカボッドの学校を夜中に荒らしまわるときも、「馬に乗った荒くれ男たちの一団（gang）」と一緒である。(281-283)

別のヨーカーであるバルタス・ヴァン・タッセルは対照的に、年配の、温厚な大農場主であるが、特徴的なのが hospitality である。パーティーでのバルタスは「満足感と上機嫌で膨れ（dilated）、中秋の満月のように真ん丸く楽し気になった顔で、客人の間を動き回っていた。もてなしの気遣いは手短なものだったが、気持ちがよく表れていて、握手をしたり、肩をポンと叩いたり、大声で笑ったり、「料理に手を伸ばして下さいよ、どうぞご自由に」とどんどん進めたりするのだった」と描写されている。(287) 顔の描写は誇張され、滑稽に描かれているが、バルタスが客人たちとの付き合いを心から楽しんでいることがよく伝わってくる。同じパーティーで、数々の料理を見て上機嫌のあまり心臓が「膨れる（dilated）」イカボッドとは対照的である。(287) ブロムもバルタスも、常に親しい仲間や知人に囲まれているというイメージが共通している。

こうしたヨーカーと比べてみると、イカボッドは奇妙なほど「仲間」と疎遠であることが分かる。まず、イカボッドの学校は、近くに小川が流れる、丘の麓という心地よい場所にあるが、「孤立して（lonely）」建っている。(274) 学校が終わった後、イカボッドは「年長の男の子たちの仲間（companion）となり、遊び相手になって」はいる。しかし、それは「学校から得られる収入が少ない」ため「生徒といい関係を続けることが必須」だからであり、いわば学校経営の打算からである。(275) それならば、同じ職業仲間である学校教師についてはどうだろうか。イカボッドは学校教師をずっと続けるつもりはなく、カトリーナと結婚して、ヴァン・タッセル家の領主となることを狙っている。首尾よく領主となった暁には、「厚かましくも自分を仲間（comrade）と呼ぶような巡回教師は、どんな奴であれ、家から蹴りだしてやる」ことを待ち望んでいる。(287) 同じ教師も「仲間」とはみなしておらず、常に個人的な利益、個人的な成功にのみ執心していることが分かる。

仲間がいないイカボッドであるが、奇妙な場面で「仲間」ができる。それは、作品のクライマックスの、馬に乗った首なし兵士（の幽霊と見られ

る者）に追いかけられる場面である。イカボッドに、「この見知らぬ、真夜中のつれ合い（companion）を好む気持ちは毛頭なかった」が、この「謎に満ちた恐ろしい」「頑固なつれ合い（companion）」はずっと押し黙ったままである。この「仲間の道ずれ（fellow traveller）」の姿がより明瞭に見えるようになると、首がないことに気づき、イカボッドの恐怖はさらに増していく。馬を蹴りたて、必死になって「彼のつれ合い（companion）」から逃れようとするが、この「幽霊」も突進しだし、以降は追いつ追われつの競争となる。（293） 同一段落の中で、「仲間」を表す表現が4回も使用されている。このことは何を意味しているであろうか。

イカボッドの視点から見ると恐ろしくて逃げだしたい「幽霊」が「つれ合い」になってしまっているという皮肉に、読者の笑いを誘うユーモアがあることは明らかだ。しかし、幽霊が仲間だという状況を象徴的に解釈することも可能である。このイメージはもちろん、作品の中で何度も出てくるように、ニューイングランドの古い清教徒の迷信や、その他の幽霊話（馬に乗った首なし兵士のものも含めて）を一心に信じ込むというイカボッドの「ヤンキー気質」を表している。しかし、さらに、イカボッドは、「幻想」一般を「仲間」にするような人間と敷衍することもできるだろう。魔力などの迷信を信じ、周囲の光景から「霊」などを読み取ろうとする性向だけでなく、ヴァン・タッセル家で豪華な料理の数々を妄想したり、領主となったら富を金銭に変え、未開地に投資し、「ケンタッキーやテネシー」などの荒野に「宮殿」を建てるという野望を持ったり、イカボッドの欲望に満ちた想像力（作品中では「忙しない空想（busy fancy）」と言及されている）には際限がない。（280） 孤独なイカボッドが常につれ合いとしているのは一貫して、こうした幻想なのである。

幻を友とするイカボッドは、その友がいれば、寂しくはない。逆に、その友を失えば孤独を感じるはずである。「スリーピー・ホロウの伝説」でイカボッドが唯一、孤独を感じる場面は、ヴァン・タッセル家のパーティーから帰るところである。真夜中の暗闇の中、静寂の中を馬に乗って家に向かうイカボッドには、ハドソン川の対岸から聞こえるかすかな犬の鳴き声も、この「人間の忠実な仲間（companion）」と自分との距離を感じさせるものでしかない。そして、イカボッドはこれまでの人生で「これほど寂しく（lonely）、気分が落ち込んだことはなかった」。（291） 真夜中という環境がそうさせているのではなく、この直前に、ヴァン・タッセル家から出る場面があることに注意する必要がある。ここで、カトリーナに拒絶されたことが語り手によって仄めかされ、すっかり落ち込んだ様子のイカボッドが描かれている。もともとカトリーナの富が目当てであったイカボッドにとって、失恋そのものがショックだったとは考えにくい。むしろ、ヴァン・タッセル家の領主になるという、ずっと抱いてきた幻想＝友を失ったことによって、痛切な孤独感をもったと解釈できる。

そして、幻想との絆という特質こそ、ヤンキーとヨーカーを分けるものとなっている。このとき、この物語の語り手が、いわゆる、unreliable narrator であることに注意しなければならない。小説の初めで、物語の舞台である「スリーピー・ホロウ」という村が、外部から隔絶された、オランダ系の人々が住む地域で、不思議な空気が漂い、住民は「あらゆる種類の荒唐無稽な信念」や「うすぼんやりした迷信」に染まっていると、しつこいほど繰り返される。（272-273） また、住民だけでなく、そこに短期滞在した人も、その土地の空気を吸い込んで「幻を見るという性向」を身につけるのだと、この地域がさらにゴシック化される。（273-274） さらに、「スリーピー・ホロウ」の空気は「伝染病」のように近隣にも広がり、あたり一帯に、幻を見るような雰囲気が影響を与えていると語られている。（289） そうすると、読者は、このあたりに住む人々はみな、イカボッドと同じように、迷信深い人々ではないかと想定してしまう。

しかし、実際の登場人物を見ると、必ずしもそのようにはなっていない。イカボッドがヴァン・タッセル家のパーティーで会う人物で、ブルーワー（Brouwer）という老人は、幽霊などまったく信じていない。（290） ブロムは、馬に乗った兵士（の幽霊）の話など馬鹿にし、ある夜、家路の途中で遭遇したとき、馬での競争を申し出て相手を打ち負かしたと、嘘の話をでっちあげてい

る。(290) さらに、イカボッドが姿を消した後、下宿先の主人、ハンス・ヴァン・リッパー（Hans Van Ripper）がイカボッドの遺品を処分することになるが、コットン・マザーの魔術史やニューイングランド暦、夢想や運勢判断に関する本などまったく役に立たないと考え、すべて燃やしている。(295) これはリッパーの現実的で実際的な性格を暗示している。このように、実際に登場するヨーカーたちは迷信と縁がなく、イカボッドとは対照的である。逆に、ブロムは、迷信深いイカボッドの性質を逆手にとり、幽霊兵士に変装すると、馬術という得意技を生かして、恋敵イカボッドを打ち負かしている。

しかしながら、こうしたヨーカーでも、ヴァン・タッセル家でのパーティーでのように、人々は幽霊話などを好んで交わしている。また、イカボッドと幽霊話をやり取りする「オランダ系の年老いた主婦方」は、こうした迷信を信じているように見える。(277) ただ、イカボッドと異なるのは、仲間と一緒のときにこうした話を交わしているという点である。イカボッドは1人でいるときにコットン・マザーの本など読み、その内容を真実だと信じきっている。すなわち、個人的な信仰になっている。それに対し、主婦たちが幽霊話を交わすのは、炉辺に集まって、冬の長い晩を一緒に過ごすときであり、ヴァン・タッセルのパーティーでは食事やダンスが終わった後、参加者がベランダの端に集まり、主人とともにパイプを吸いながら昔話をするときである。(277, 288, 296)つまり、話をするのは、その内容そのものよりも、お互いに楽しむ、お互いの関係を温めるためであると考えられる。別の言い方をすれば、話が真実か嘘かなどどうでもよく、お互いに楽しむことが目的だと考えられるのである。

それを裏付けるものが、作品の最後にある「追記」(POSTSCRIPT) である。ここでは、ニューヨーク市の集まりで、イカボッドの物語をし終えた老人と、その聴衆、その聴衆の中で1人厳粛な表情をした紳士が登場する。マーティン・ロスが示唆している通り、この追記は、ブロムとイカボッドの対決の「反復」であり、語り手の老人が、ニューイングランド的な、厳粛な紳士を打ち負かす話となっている[11]。語り手が話し終えると、2～3人の聴衆から大きな笑い声が起こる。しかし、この紳士1人だけ、ずっと真面目な表情を浮かべ、疑っているような仕草をしている。最後に、どうもこの話は誇張されているように思われる、話の中で一、二点、本当かと疑いたくなるようなところがあると言う。すると、紳士を「勝ち誇ったような横目」で見ていた語り手は、「その点に関しては、あたし自身、話の半分も信じちゃおりませんよ」と切り返すのである。(297) この語り手のセリフが、この追記の軽妙なオチとなっており、作品はここで終わっている。物語に教訓や真実を求める、真面目なヤンキーに対し、ヨーカーの語り手は聴衆を「楽しませるために相当な努力をして」おり、実際に「集まった人々（company)」の笑いを引き起こすことに成功している。(296) ヨーカーにとって物語の真実性など問題ではなく、それは人を楽しませるためのもの、companionship のためのものなのである。

幽霊（幻）を唯一の友としていたイカボッド自身が、最後はスリーピー・ホロウで伝説化され、廃屋となった学校に現れる「幽霊」になるという結末は、何とも皮肉である。(296) しかし、裕福なヨーカーの大地主の富を狙い、それを土地投機に利用するという野望を抱いたヤンキーの侵略者を追い払ったうえ、独立戦争時の人物と同様、幽霊として土地の伝説に取り込むところには、ヨーカーの大らかさやしたたかさが暗示されている。イカボッドの侵略も、お互いの関係を温めるための物語として緩和され、他の伝説と同じように土地の伝統に吸収したのである。

3. ニューヨークとは：スリーピー・ホロウの再考

「スリーピー・ホロウの伝説」の内容がドイツの伝説に多くを負っていることは、すでに批評家が指摘しているところである[12]。また、先述したように、民間伝承におけるステレオタイプを使っていることもホフマンが指摘している通りである。タリタウンから「3マイルほど」離れていているという、スリーピー・ホロウという作品の舞台も、架空の村である。(272-273) それゆえ、この作品は虚構性の強いゴシック・ロマンスだといえる。しかし、このテクストは同時に、当時のニューヨークの現実を反映してもいる。この点が

これまで奇妙なほど批評家に無視されてきた。

「スリーピー・ホロウの伝説」は、米国が英国から独立して間もない頃のニューヨークの村に、コネティカット州出身のニューイングランド人イカボッドが入り込み、大地主の土地を狙うという話である。作品の時代背景に近いと考えられる1790年から、30年後の1820年までに、ニューヨークの人口は、34万120人から137万2812人に膨れ上がっている。その人口増加の主な原因は、ニューイングランドから土地目当てに入り込んだ移住者であった[13]。ニューイングランド内では独立戦争時までに、南部の奥地や最北のメイン州沿岸まで移住者が広がるようになる。独立後には、そのニューイングランドを埋め尽くした人々が、今後は奔流のようにニューヨークになだれ込み、ハドソン川沿いの村、その北方で東西に流れるモホーク川沿いに、さらにニューヨーク中央部や広大な西部にまで広がっていき、一世代の間に「ニューイングランドの息子たちはニューヨーク州のあらゆる町や村で見つけることができるように」までなる[14]。1800年から1820年の間にニューヨークを訪れた、ニューイングランド牧師ティモシー・ドワイト（Timothy Dwight）は、ニューヨークの「およそ3/5から2/3の住民」はニューイングランド出身の人々であろうと推定し、ニューヨークは「ニューイングランドからの植民地（Colony）」とみなせるとまで語っている[15]。アーヴィングのスリーピー・ホロウは、ハドソン川沿いという設定になっているが、ハドソン川沿いの村、特に西岸の村々は、何千ものニューイングランド人を引きつけ、オランダ系の人々が住む村々に「ヤンキー」が浸透していた[16]。タッセル家の土地獲得というイカボッドの野望は、決して当時の状況と無関係ではなく、歴史学者が「ヤンキーのニューヨーク侵略」と呼ぶものを如実に反映しているのである[17]。

イカボッドが学校教師であり、教会で賛美歌の名手であることも偶然ではない。ドワイトはニューヨーク旅行記の中で、ニューイングランド人が開拓した、ある西部の地域に言及し、その急速な発展に感嘆しているが、家や農場と同時に、多数の学校や教会が確立していることを強調し、「文明」の進歩の証として賛美している[18]。ドワイトを含めニューイングランド人が町の建設でもっとも重視するのが、教育と信仰であることを物語っている。歴史的に見ても、「ヤンキーのニューヨーク侵略」の結果、ニューイングランド人が最も影響力を振るった職業は、牧師や医師、法律家、学校教師であった。ニューヨークの牧師や学校教師のうち高い割合の人々が、ニューイングランドの学校で訓練されていた[19]。「スリーピー・ホロウの伝説」で、イカボッドが「オランダ系のいたずらっ子」をムチで罰する様子が描かれているが、「ヤンキーの侵略」後、教育の効果でニューヨークではオランダ系やドイツ系の人々が徐々に方言を失っていったという[20]。（275）イカボッドが「オランダの移住者を祖先に持つ住民たち」の村で、ニューイングランド式の規律を子供に叩き込んでいくというのは、架空の話ではなく、ニューイングランド人が及ぼした文化的影響を暗示しているのである。（272）

民間伝承的ヤンキーであるイカボッドが、現実のニューイングランド人の流入を反映しているとしたら、物語の舞台の、スリーピー・ホロウや近隣の地域も、現実のニューヨークを反映していると考えられる。これまで、批評家は、アーヴィングの「ニューヨーク」を、「オランダ系」地域とステレオタイプ化してきた。それは、スリーピー・ホロウがオランダ植民者の村であると語られたり、イカボッドが狙うカトリーナもオランダ系大地主の娘であったりするため、当然かもしれない。たとえば、アレン・ガットマンはイカボッドの消失によって「スリーピー・ホロウのオランダ人」は「文化的独立」を勝ち取ったと述べ、メアリ・ボウデンは、『ニューヨーク史』と同じように、アーヴィングは頑固な「オランダ系」を皮肉っていると解釈している。マーティン・ロスも、イカボッドは「オランダ系コミュニティ」の伝説に負け、小説の「追記」は、「ヤンキー」（ニューイングランド人）と「オランダ人」（ニューヨーク人ではない）の対立の再現だと解釈している[21]。近年では、イカボッドとブロムの対立、ニューイングランドとニューヨークの地方的対立は、「イングランド系」対「オランダ系」の対立であると、単純な民族的対立にすり替える批評まで出ている[22]。地方的対立を明確に読み取っている慧眼のリンジ

でさえ、「スリーピー・ホロウの伝説」において、ニューイングランドと違うニューヨークとは、秩序や伝統、家族や永続性を重んじる、安定した社会だと一般化・単純化している[23]。

しかしながら、こうしたすり替えや一般化は、歴史とこのテクストとの関係を無視することになる。当時のニューヨークを歴史的な観点から見た場合、ニューイングランドと異なる大きな特徴の1つは、民族的多様性である[24]。オランダ植民地時代から民族的多様性は顕著であったが、1664年にイギリス植民地となった後もそれは温存され、ワロン人（ベルギー系）、ユグノー（フランス系）、別のフランス系、スコッチ･アイリッシュ系、ドイツ系、アフリカ系、スウェーデン系、ユダヤ系、プファルツ人（ドイツ系）などがいた。また、もともと支配的であったオランダ系は徐々にイギリス系に飲み込まれていき、独立戦争時の1775年には「白人人口の約半分」はイングランド系であった[25]。「スリーピー・ホロウ」はハドソン川沿いの村となっているが、歴史学者のロバート・クーン・マックグレガーによれば、ハドソン川沿いの村々に最初に植民したグループは、スコットランド人、オランダ人、イングランド人、ユグノー、プファルツ人、ワロン人と多様であった。しかも、これはあくまで、その村の最初の支配的グループであり、当然、その後別の民族の流入も想定され、また先住民やアフリカ系も考慮しなければいけないため、実際の状況はより多様で複雑だったと考えられる[26]。「スリーピー・ホロウの伝説」において、ニューヨーク人をただ「オランダ系」と一般化することはできない。また、スリーピー・ホロウがオランダ人の植民した場所だとしても、「オランダ人の村」とも限らない。上記のように民族的多様性を考慮しなければならないほか、イギリスの植民地になってからは以前よりイギリス系との混交も進んだはずである。

実際に「スリーピー・ホロウの伝説」を読むと、ニューヨークの民族的多様性が極めて明快に示されている。作品の最初で、「広い海（Tappaan Zee）というハドソン川のオランダ語名が紹介され、川沿いの交易の町は「グリーンズボロウ（Greensburgh）」というスコットランド系の名前であること、その町が別名「タリタウン（Tarrytown）」（イングランド系の名前）であることが語られる。（272） さらに、その町から3マイルほど離れたスリーピー・ホロウという盆地の住民は、「最初に植民したオランダ人」の子孫であるが、その村に植民初期のころ「教養あるドイツ人の魔術師」が魔法をかけたとか、ヘンドリック・ハドソンが発見する前「部族の預言者もしくは魔法使いの、老いたインディアンの酋長」がそこに住んでいたとかいった、土地の伝説が紹介されている。（273） さらに、タッセル家の従者や近隣の住民として、アフリカ系の人々も登場している。（284, 288） すなわち、オランダ系、スコットランド系、イングランド系、ドイツ系、先住民、アフリカ系が言及されており、明らかに現実のニューヨークが反映されている。また、村の地名が「スリーピー・ホロウ（Sleepy Hollow）」という英語名であり、そこに住む田舎っぽい若者たちは「スリーピー・ホロウ･ボーイズ（Sleepy Hollow Boys）」と呼ばれ、さらに、村と近隣の住民たちが英語を話していることから、イギリス植民地であった影響を読み取ることができる。（272-273） つまり、文化的にイギリス系に同化しているのである。

次に、人物の民族性に注目すると、興味深いことが分かる。主要な登場人物としては、大地主バルタス・ヴァン・タッセル、イカボッドの恋敵ブロム・ボーンズ、イカボッドを下宿させている農民ハンス･ヴァン･リッパーがいる。このうち、タッセルについて、ホフマンが指摘しているように、アーヴィングの他の作品に見られるオランダ系のステレオタイプ（太っていたり快楽を好んだりする姿）と重なっている[27]。また、先述したように、ホフマンはブロムを、ヤンキーと対立する「奥地人（the Backwoodsman）」であると解釈している。だが、そうすると、オランダ系のステレオタイプと合致しなくなるため、ステレオタイプ的ではない、「現実に近いオランダ系の辺境人（realistic Dutch frontiersman）」であると言い換えている[28]。

確かに、タッセルについては「裕福なオランダ系の農家（a substantial Dutch farmer）」と紹介されている。また、リッパーについても「怒りっぽいオランダ系老人（a choleric old Dutchman）」と述べられている。（278, 284） しかし、ブロムは「名前はエイブラハム、もしくは、オランダの

略語でいうとブロム・ヴァン・ブラントといい（of the name of Abraham, or, according to the Dutch abbreviation, Brom Van Brunt）、そのあたりの地域では英雄であった」と紹介されている。（281）前者の2人と異なり、「オランダ系」と明言されていない。ただオランダ語名が言及されているだけであり、名前自体は「エイブラハム」という英語名になっている。このことは、ブロムがイギリス系であること、もしくは、オランダ系とイギリス系の両方の祖先を持っていることを暗示していると考えられる。

名前だけでなく、ブロムの特技も示唆的である。ブロムは「乗馬のことをよく知り、かなりの名手であることで有名で」あり、「あらゆる馬競争（races）や闘鶏（cock-fights）では抜きんでていた」と語られている。（281）競馬や闘鶏への言及は、ブロムが勝負事好き、賭け事好きであることを示しているが、ここで注目したいのが、競馬も闘鶏もオランダ系が植民地に持ち込んだスポーツ（遊び）ではないという事実である。それはイギリス系が移植したもののであり、イギリスのスポーツの伝統に連なっている[29]。闘鶏は18世紀のイギリス本国で宿屋や酒場を中心に、社会階層を超え人気を博したスポーツであり、同時期のニューヨーク植民地でも、日常的に見られるものとなっていた[30]。

また、ブロムがイカボッドを打ち負かす最大の武器となった競馬については、ニューヨークと特別な関係がある。1664年にイギリス植民地となったとき、新しい総督が、植民地で最初となる、イギリス式の競馬場をニューヨークのロング・アイランドに建設しているからである[31]。競馬場の導入が、オランダ植民地からイギリス植民地への移行と重なっていることは興味深い。

以後、ロング・アイランドは競馬のメッカとなるが、1804年にこの地に旅行したドワイトが面白いことを書いている。キングス郡は主にオランダ系が植民した場所であり、クイーンズ郡も部分的にそうであると述べた後、次のように語る。

> この2つの郡の、オランダ系以外の住民たちは様々である。たくさんの出自を持ち、性格も実に多様性に富んでいる。宗教でいえば、監督派、長老派、クウェーカー、バプティスト、メソディスト、ニヒリスト［理神論者を指す］である。全般的に、勤勉で、倹約や節約を旨としている。商売には誰よりも長けている。それゆえ、彼らが富裕であることは驚くにあたらない。ここでは長い間、馬の飼育がいちばん人気のある仕事となっている。そして、競馬（horse racing）（これについてはヘムステッド・プレイン［競馬場の名前］が巨大な劇場となっている）、これがいちばんの娯楽となっているのである[32]。

ここでドワイトは、この2つの郡で、商売としても娯楽としても競馬が中心であることを述べている。注意しなければいけないのが、これが「オランダ系」以外の人々に関する記述であり、また、羅列された宗派をみると、オランダ改革派やドイツ改革派、ルター派といった非イギリス系のものがないことである。宗派は確かに「様々」ではあるが、すべてイギリス系である。ドワイトの観察は、当時のニューヨークにおいて、競馬がイギリス系の人々の娯楽であったことを暗示している。

さらに、アーヴィング自身、闘鶏や競馬とイギリス系との結びつきについて知識があったと思われる。オランダ領時代のニューヨークを扱った歴史物語『ニューヨーク史』の中で、イギリス系のメリーランド植民地の住民が、オランダ領内に侵入するという出来事が描かれている。アーヴィングは当時のオランダ領知事ウィルヘルマス・キフト（Wilhelmus Kieft）に、彼らやヴァージニア植民地人を「競馬（horse-racing）、闘鶏（cock-fighting）、ニグロ生産」のためにアメリカ大陸にやってきた連中と呼ばせている[33]。こうした表現にはおそらく野蛮で低俗な連中という含みがあると解釈できるが、注目したいのは、競馬や闘鶏が、南方のイギリス植民地の習俗とされていることである。この話の時代は17世紀前半であり、「スリーピー・ホロウの伝説」の時代はそれから100年以上後の、アメリカ独立後のニューヨークであるが、ブロムが文化的・民族的に、南方植民地のイギリス系の子孫である可能性を暗示しているのである。

このように、ブロムに関し、その名前、闘鶏や競馬との結びつきを考慮すると、ブロムが、ニューヨークにおけるイギリス系の存在、イギリス系の

習俗や伝統を体現していると解釈することができる。さらに、この闘鶏や競馬との関わりは、民族性だけでなく、ブロムの地方性もあらためて浮き彫りにする。ニューイングランドでは、17 世紀の清教徒が、神を愚弄する行いとして、賭け事を非合法化し、それと結びついたスポーツを酷評した。この伝統が受け継がれ、18 世紀に闘鶏はイギリス植民地で盛んにはなるが、それはニューヨーク以南の地域のことであった[34]。同様に、17 世紀の清教徒は競馬も非合法化したが、後の 18 世紀になるとボストンでは公に競馬の広告が出るようになる。しかし、競馬は「ニューイングランドの生活娯楽で中心的な位置を占めることは決してなかった」[35]。これに対し、ニューヨークでは先述のように、ロング・アイランドで北米初の競馬場ができ、1736 年にはやはり初となる円形の競馬場が建設されている[36]。歴史学者のナンシー・ストルーナによれば、いわゆるサラブレッドによる競馬は、イギリス式の長距離競争という形で、おそらくニューヨークで始まり、1760 年代までに「ニューヨークからジョージアにかけて」活況を呈すようになったという[37]。

しかし、中部から南部にかけて盛んになった競馬について、ドワイトは、先ほどの引用部分の続きで、次のように述べている。

> このような娯楽（sport）が流行しているような場所はどこであれ、・・・道徳や宗教の普及など決して期待できるものではない。これほど早い時期から植民がなされた地域で、ここまで人間の重大事が軽視されている場所はほとんどない。たとえ富裕な家庭の出身であっても、ここの若者たちは、通常、読み書き算盤以上のことはほとんど習わない。それゆえ、社会は低い水準にあり、知識や感性をほとんど必要としない。実のところ、財産獲得に役に立つ場合を除いて、知性というものは住民全体に無視されている[38]。

否定的表現が多い、この部分で、ドワイトは、競馬のような娯楽が、道徳、信仰、知性の欠如をもたらし、社会の進歩を阻害していると嘆いている。このような感性は、ニューイングランドの清教徒的な伝統を極めてよく示していると考えられる。

そのようなニューイングランドの出身であるイカボッドが、乗馬の名手であるわけがない。「スリーピー・ホロウの伝説」の最後で、ブロム扮する幽霊騎手に追いかけられるイカボッドは、逃げる途中で鞍を馬から落としてしまう。投げ出されないように馬に必死でしがみつく様子が、哀れで滑稽なほど無様に描かれる。語り手は二度もイカボッドを「未熟な騎手（unskillful rider）」と呼んでいる。(294)乗馬に熟練したブロムに、かぼちゃを投げつけられ、避けるすべもなく、当たって馬から落ちるほかない。知性を持ち、賛美歌の名手で、ダンスなど都会的・中産階級的な素養も身につけたニューイングランド人であったが、競馬だけは不得意であった。イカボッドは名前からイギリス系であることは明らかだが、ブロムもイギリス系であるため、この 2 人の対決は、これまで批評家が述べてきたような、イギリス系とオランダ系の争いであるとは解釈できない。こうした民族的対立の図式は脱構築され、代わりにニューイングランド対ニューヨークという地方的対立が鮮明化する。イカボッドは、競馬という、植民地時代から根付いていた、ニューヨークの文化的伝統に敗れたのである。ブロムの勝利は、闘鶏や競馬などのスポーツを禁止しなかったニューヨークの宗教的寛容の勝利となっている。

4. おわりに

本稿の目的は、「スリーピー・ホロウの伝説」の地方タイプ（イカボッドとブロム）を再考することであった。ニューイングランドとニューヨークの地方的対立というリンジの解釈を発展させ、アーヴィング独自の探求を分析した。イカボッドが典型的なヤンキーになっていると同時に、仲間意識の強いヨーカーとの対比から、ヤンキーとの特質として孤立主義的で、幻想を友にするという性向が示されていることを明らかにした。また、小説内の分析から離れ、歴史的背景との関わりから見た場合、当時のニューヨークへのニューイングランド人の流入をイカボッドが体現し、スリーピー・ホロウおよび近隣の地域がニューヨークの民族的多様性や、オランダからイギリス植民地に移行した歴史を反映していることを論じた。

特に、これまで「オランダ系」と解釈されてきたブロムを再考し、ニューヨークにおけるイギリス系の存在を体現しており、同時に、ニューイングランドとは異なるニューヨークの文化的伝統も体現していると結論づけた。イカボッドに対するブロムの勝利は、幻想を信奉するイカボッドのヤンキー的特徴を逆手にとっただけでなく、競馬というニューヨークのスポーツの伝統によるブロムの特技によってもたらされたものである。

上記のように、ニューヨークの地域性とブロムの勝利との関わりを論じたが、競馬の場面の前の、タッセル家でのパーティーでもニューヨークの歴史が前景化している。ブロムはここで、首なし騎士の幽霊を競馬で打ち負かしたと嘘の話を語り、イカボッドを信じ込ませ、後に変装した自分を幽霊騎士だと騙すことに成功する。(290) なぜブロムにこのような話ができたのかというと、この地域は独立戦争時に戦場となり、パーティーではその戦争の英雄に関する話や、戦争と関わりある人物（アンドレ少佐など）の幽霊話が好んで交わされているからである。(288-289) ブロムが扮する首無し騎士も、戦争時、ドイツから傭兵されたヘッセン人兵士が幽霊として伝説化されたものである。(273) 歴史的にみると、独立戦争時にニューヨーク市に英国軍本部が置かれたニューヨークは13植民地の中で、もっとも長い期間、もっとも戦禍にさらされた。独立戦争の戦闘のうち約1/3はニューヨークに集中し、戦争後ニューヨーク市の人口はおよそ半分に減ったという[39]。他のどの植民地よりも戦争を経験し、それにまつわる伝説も必然的に多くなったニューヨークの状況が、ブロムに有利に働いているのである。ブロムの勝利は、ニューヨークという地方そのもの――スポーツの伝統だけでなく、歴史やそれにまつわる物語の伝統に至るまで――がもたらしたものなのである。

「スリーピー・ホロウの伝説」では最終的に、競馬で勝ったブロムが、カトリーナと結婚することにも成功する。この結末は、民族的にはイギリス系とオランダ系の結婚を象徴している。それは、多民族とはいえ、主にオランダ系とイギリス系の混成として発展した、植民地時代のニューヨークを反映していると考えられる。一方、植民地時代が終わって「アメリカ合州国」となり、隣接するコネティカット州から流入した「新参者」イカボッドは拒絶されている。また、ブロムが熟練していた闘鶏や競馬は、独立後ではなく、イギリス植民地時代に移植され、もっとも人気のあるスポーツとなったものである[40]。こうしたことを考慮すると、作者アーヴィングの過去に対する愛着が読み取れる。物語では、新興国の動向を体現するイカボッドが放逐され、植民地時代以来の伝統がブロムとカトリーナによって存続されているからである。『スケッチ・ブック』の序文となる「著者の自身についての物語」で、アーヴィングは「現在の平凡な現実」から逃れ「過去のぼんやりした栄華」に忘我したいという願望について語っている[41]。ここはアメリカとヨーロッパを比較した部分であるが、この「過去」はアメリカの過去にも当てはめることができるだろう。「スリーピー・ホロウの伝説」で読み取れるのは、ヤンキーが「植民地化」していく現実のニューヨークではなく、イギリス植民地時代の「古き良き」ニューヨークを思慕するアーヴィングの姿なのである。

---

1 Hedges, 153-154.
2 Hoffman, 84-92.
3 Ringe, 458-463.
4 Bowden, 72-74; Leary, 201; Roth, 161-168; Thompson, 136-138.
5 Irving (1978), 273-277. 以下、「スリーピー・ホロウの伝説」からの引用はこの版により、ページ番号を末尾にカッコで示す。
6 Rourke, 15-18.
7 Hoffman, 49-50. Rourke, 15-18.
8 Hoffman, 50-56; Rourke, 17-19.
9 アーヴィングだけでなく、他のニューヨーク出身の作家にもニューイングランド人を諷刺する伝統を見ることができる。Fox, 200-206; Ringe, 456-460. 他に、ジェイムズ・フェニモア・クーパー（James Fenimore Cooper）については、ケイ・ハウスの分析が秀逸である。House, 93-145. スーザン・ウォーナー（Susan Warner）については、ベストセラー小説『広い広い世界』（*The Wide, Wide World*, 1850）におけるヤンキーとヨーカーとの興味深い比較を、エドワード・フォスターが行なっている。Foster, 45-46. また、ハーマン・メルヴィルも『オムー』（*Omoo*, 1847）において、メイン州出身の「ヤンキー」であるジーク（Zeke）を、「勤労」の権化のように戯画化している。Melville, 204-206.
10 Roth, 165.
11 Roth, 11.
12 Pochmann, 477-507; Reichart, 30-31

[13] Ellis et. al., 187-189.
[14] Ellis, 4-5
[15] Dwight, 266.
[16] Ellis, 7.
[17] Ellis, 3; Meinig, 143-144.
[18] Dwight, 530-531.
[19] Ellis, 9; Fox, 210-211.
[20] Ellis, 17.
[21] Guttman, 172; Bowden, 73; Roth, 167
[22] Thompson, 136-137
[23] Ringe, 459, 461, 466.
[24] Fox, 22.
[25] Ellis et al., 21, 61.
[26] McGregor, 202-204.
[27] Hoffman, 86.
[28] Hoffman, 84, 86.
[29] *The Encyclopedia Americana*, Vol. 7., 166 and Vol. 14, 410; Harvey, 6. オランダ系が持ち込んだスポーツについては、Klein, 69-70.
[30] Rader, 5,8.
[31] Rader, 8; Struna, 76.
[32] Dwight, 333.
[33] Irving (1981), 239-240.
[34] Rader, 7; Struna, 149.
[35] Rader, 7.
[36] Rader, 6.
[37] Struna, 126.
[38] Dwight, 333.
[39] Ellis et al., 118; Klein, 234.
[40] 独立後の米国では、主に宗教界からの批判により競馬や闘鶏が禁止されていくようになる。『スケッチ・ブック』の出版は 1819 年から 1820 年だが、ニューヨーク州ではそれ以前の、1802 年に競馬が禁止された。1818 年と 1819 年のみ許可されるが、1820 年には再び禁止されている。Harvey, 130-131; Longrigg, 211.
[41] Irving (1978), 9.

引用文献

Alderman, Ralph M. ed. *Critical Essays on Washington Irving*. Boston: G.K. Hall, 1990.

Bowden, Mary Weatherspoon. *Washington Irving*. Boston: Twayne Publishers, 1981.

Bruccoli, Matthew J. ed. *The Chief Glory of Every People*. Carbondale, Illinois: Southern Illinois University Press, 1973.

Cayne, Bernard S. ed. *The Encyclopedia Americana*. International Edition. Vols. 7 and 14. Darbury, Connecticut: Grolier Incorporated, 1981.

Dwight, Timothy D. *Travels in New England, and New York*. Vol. 3. New Haven, 1822.

Ellis, David M. "The Yankee Invasion of New York, 1783-1850." *New York History* 32 (1951): 3-17.

Ellis, David M, James A. Frost, Harold C. Syrett and Harry J. Carman. eds. *A Short History of New York State*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1957.

Foster, Edward Halsey. *Susan and Anna Warner*. Boston: Twayne Publishers, n.d.

Fox, Dixon Ryan. *Yankees and Yorkers*. New York: Ira J. Friedman, Inc, 1963.

Guttmann, Allen. "Washington Irving and the Conservative Imagination." *American Literature* 36. 2 (1964): 165-173.

Harvey, John. *Racing in America, 1605-1865*. Vol. 1. New York: Scribner's, 1944.

Hedges, William L. "Washington Irving: Nonsense, the Fat of the Land and the Dream of Indolence." *The Chief Glory of Every People*. ed. Matthew J. Bruccoli, 141-160.

Hoffman, Daniel. *Form and Fable in American Fiction*. New York: Oxford University Press, 1961.

House, Kay Seymour. *Cooper's Americans*. Columbus, Ohio: Ohio State University Press, 1965.

Irving, Washington. *A History of New-York*. Tarrytown, New York: Sleepy Hollow Press, 1981.

---. *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent*. ed. Haskell Springer. Boston: Twayne Publishers, 1978.

Klein, Milton M. ed. *The Empire State: A History of New York*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 2001.

Leary, Lewis. "Washington Irving and the Comic Imagination." *Critical Essays on Washington Irving*. ed. Ralph M. Alderman. Boston: G.K. Hall, 1990, 191-202.

Longrigg, Roger. *The History of Horse Racing*. London and Basingstoke: Macmillan, 1972.

McGregor, Robert Kuhn. "Settlement Variation and Cultural Adaption in the Immigration History of Colonial New York." *New York History* 73 (1992): 193-212.

Meinig, D. W. "Geography of Expansion, 1785-1855." *The Geography of New York State*. ed. John H. Thompson, 140-171.

Melville, Herman. *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*. eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle. Evanston and Chicago: Northwestern University Press and Newberry Library, 1968.

Pochmann, Henry A. "Irving's German Sources in *The Sketch Book." Studies in Philology*. 27 (1930): 477-507.

Rader, Benjamin G. *American Sports: From the Age of Folk Games to the Age of Televised Sports*. Fourth Edition. Upper Saddle River, New Jersey: Prentice Hall, 1999.

Reichart, Walter A. *Washington Irving and Germany*. Ann Arbor, Michigan: University of Michigan Press, 1957.

Ringe, Donald A. "New York and New England: Irving's Criticism of American Society." *American Literature* 38. 4 (1967): 455-467.

Roth, Martin. *Comedy in America: The Lost World of Washington Irving*. Port Washington, New York: Kennikat Press, 1976.

Rourke, Constance. *American Humor: A Study of the National Character*. New York: New York Review Book, 2004.

Struna, Nancy L. *People of Prowess: Sports, Leisure, and Labor in Early Anglo-America*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1996.

Thompson, John H. ed. *The Geography of New York State*. Syracuse, New York: Syracuse University Press, 1966.

Thompson, Terry W. "Lively But Complicated: English Hegemony in 'The Legend of Sleepy Hollow.'" *Midwest Quarterly* 54. 2 (2013): 136-148.

Yankee vs. Yorker:

A Reinvestigation of Regional Characters in “The Legend of Sleepy Hollow”

YONEYAMA Masafumi

Abstract

This paper examines the conflict between New England and New York in Washington Irving’s “The Legend of Sleepy Hollow” (1819-1820). In his pathbreaking essay, Donald A. Ringe illuminates this regional conflict by analyzing the story’s major characters. Ringe argues that Ichabod Crane epitomizes the Yankee stereotype in American folklore: a restless person who desires change and money. He also argues that Sleepy Hollow, a New York community, represents Irving’s ideal: a society of tradition, order and stability. Focusing mainly on Crane and Brom Bones, two regional characters, this paper attempts to develop Ringe’s point in three ways. First, it examines how Irving expands on the Yankee stereotype to suggest what he thinks the New England character really is. Second, it examines how Crane’s coming to Sleepy Hollow reflects what historians call “the Yankee invasion of New York between 1783 and 1850.” Third, it analyzes how Brom and the New York communities in the story represent the ethnic diversity and the sports culture of New York of the late 18th century. Ultimately, this paper shows how Irving gives a more historically-based presentation of the conflict between Yankees and Yorkers.

（2021 年 9 月 28 日受理）